HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大江健三郎の研究 ： 一九八〇年代以降の小説における自作リライトの手法［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	時, 渝軒
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12828号
Issue Date	2017-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67904
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Shi_Yuxuan_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　時　　渝　軒

主査　教　授　中　村　三　春
審査委員　副査　准教授　水　溜　真由美
副査　教　授　瀬名波　栄　潤

学位論文題名

大江健三郎の研究
――一九八〇年代以降の小説における自作リライトの手法――

・当該研究領域における本論文の研究成果

大江健三郎はその長い作家活動の間に膨大な作品を発表し続けており、その中でも特に二〇〇〇年代以降の作品については、散発的な論考以外にはまとまった研究が乏しい。また、一九八〇年代以降の大江の小説が、過去に発表した自分の作品を基とし、それを縦横無尽に作り換えて新作とする手法、大江自身の言葉では「書き直し」の手法によっていることは、大江自身が明言していることもあって広く知られてはいるものの、その手法を理論的に、また実作品との関わりにおいて具体的に論じたものは数えるほどしかない。

本論文は、この「書き直し」を「自作リライト」の手法と呼び、この手法とそれによる所産について、現在の研究状況を踏まえ、理論と実作の両方向から徹底した究明を加えた。理論面については、一つまたは複数の自作を基とし、それを引用・翻案・改作・パロディなどの多彩な仕方で組み換え、さらに内外の他の作家の先行作品をも組み込んで別次元の作品を作り出す総合的な創作方法として解明した。実作面については、一九八〇年の「『芽むしり仔撃ち』裁判」を起点として、二〇一三年の『晩年様式集（イン・レイト・スタイル）』に至る十編ほどの長短編小説と、それらに関係する多数の作品とを執拗かつ精緻に分析し、自作リライトの理論に照らして評価を行った。

その結果として本論文は、一九八〇年代から九〇年代にかけて、自作リライトの手法が小説ジャンルと書くこととの関わりをめぐって確立し展開したこと、二〇〇〇年代において、その手法が「最後の小説」という概念において完成・成熟・統合の境地を示したこと、さらにその後から現在に至るまでの間に、その手法がむしろ反完成・反統合を目指す「晩年の様式」として結晶したことを、時代を追って明確に跡づけるに至った。

これらの特長によって、本論文は大江文学の研究において、極めて傑出した研究成果を示すものと言うことができる。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文の研究対象として選ばれた一九八〇年代以降の大江の小説は、いずれも複雑で難解であり、その理由はまさにそれらがことごとく、その希有な自作リライトの手法を基盤としている点にある。本論文は、第一にそれらの作品を根気よく丁寧に読破・読解し、第二にそこに引用・翻案・改作・パロディの形で導入されている大江の過去の自作や他作家の作品を見出し、第三にそれら複数の作

品間の錯綜した関係を丹念に剔抉・整理した上で構築されている。

またそれを分析・評価する論述は精緻で的確であり、大江の作品については、初期から現在に至るほぼすべての作品を検討の範囲に収め、それらが自作リライトの手法によっていかに新たな次元に高められたかを、一九八〇年代以降の時代を追いながら綿密に論証している。さらにそれらにおける外国作品の言及・導入についても、原著者と翻訳を考慮に入れた上で受容の様式を問題とする比較文学的な手続きを適切に踏まえて精査している。

本論文はまた、このような観点からする小説の構造論・ジャンル論にとどまらず、セクシュアリティと暴力の問題、明治以降の日本のナショナリズムの歴史、震災などのカタストロフィーの局面など、大江がこの間に取り上げてきた多様なテーマをも確実に掬い上げ、自作リライトの手法との関わりにおいて論述に統合しえている。これらのことから、本審査委員会においては、原則的に本論文を、高い水準にある研究として評価した。

ただし、幾つかの点に亙って、やや疑問の余地もなしとはしない。第一に、本論文では大江の方法論を小説作法における進化論的な思考と位置づけているが、時代ごとに変容を示す大江の自作リライトの手法が、果たして真に進化したものか否かの論証が不十分であること、第二に、『取り替え子（チェンジリング)』の核心として、「アレ」と呼ばれる事件をセクシュアリティのみで説明することは必ずしも十分ではなく、解釈に柔軟性が求められること、第三に、自作リライトの手法が最終的に読者を巻き込む読者動員の策略であるとされるが、そこに読者論的な調和主義・楽天主義が見られるのではないかということ、第四に、本論文は大江の自作リライトの手法を解釈・分析して明確化した反面、それをいかに現代的観点から評価するかの評価軸が乏しいように思われることなどの点である。

しかし、これらの諸点はいずれも文芸解釈における多様性の範囲に収まるものでもあり、いささかも本論文全体の完成度を損なうものではなく、また結論で展望されたように今後も大江及び他作家における自作リライトの研究を続ける中で十分に昇華しうる課題である。

本審査委員会は、以上のような審査結果に基づき、全員一致により、本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。